九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

十八世紀に於ける文藝サロン

成瀬, 正一

https://doi.org/10.15017/2557129

出版情報：文學研究. 2, pp.75-94, 1932-10-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

十八世紀に於ける文藝サロン

成瀬正一

I

佛蘭西に於ける文藝サロンの歴史は、隨分古いものであつて、その濫觴期は、十六世紀の末頃から十七世紀の初期と云ふことになつてゐる。その後二百年の黄金時代を經て、大革命に到り一旦中絶したけれども、十九世紀に入ては、更に新しき姿を以て甦生してゐる。最近に於ては、到底昔日の慨がないとは云へ、猶容易にそれらしき存在を指摘することが出來る。かう云ふところから考へて、佛蘭西のサロンは、文藝と云ふものが死滅せざる限り、常に附隨生存して行く現象ではないかとも思はれる。

無論サロンなるものは、佛蘭西の獨占に非ずして、英吉利西、伊太利、獨逸等の諸國にも同樣認めらるゝ現象なることを、我々は、屢々その道の人から聞かされる。がしかし、そのことに間違がないにしても、佛蘭西、殊に巴里に於ける文藝サロンは、その優雅高尚なる氣品により、全歐の王座を占めるに足り、從て異國の文人達も、こゝに出入することを以て、通人の資格を獲たものとなし、心中窃な誇を感ずるのが常であつた。その上この流行は、何時の時

代に於ても、屢々巴里の上流社會を風靡してゐたから、苟も趣味を誇る婦人達は、皆競うてその客間を開放し、多くの文人雅客を迎へるのを習慣としてゐた。その結果、都のサロンは驚くべき數に達する。Dictionnaire des Précieuses の著者ソメエズは、十七世紀の末頃巴里に於て、少くとも八百以上のサロンが開かれてゐたことを告げてゐる。(1) さうして見ればサロンは、その質から見ても量から見ても、佛蘭西及佛蘭西文學の一名物たるを失はないのである。

サロンも時代によつて、それ〴〵特殊な色彩調子を帶びてゐるから、一概には云へないが、ごく一般的な共通性は、文藝藝術を中心とした社交界とでも稱すべきであらう。この頃流行の文藝座談會の一種と思へば大した誤はない。こゝに集る者は文人藝術家思想家を始とし、粹人通人を以て自任する貴族貴婦人の類で、これを主宰する者は、常にこの家の女主人である。その行事は、自由なる會話が重であつた。新作を朗讀する文人に對し、各自がその所感を述べたり、評判の芝居に就て話合うたり、その他戯文狂歌を作たり、時には酒宴を催したり、或は舞臺を設けて素人劇を演ずることもある。がしかし、これ等は眞面な部類に屬する。吾人はその中に、賭博に耽り、戀愛の斷引を弄し、或は名利の術策を廻らすと云ふやうな風習も、隨分盛であつたことを認めなくてはならない。殊にそれは十八世紀に於て甚しい。要するにサロンなるものは、社交性と饒舌癖に富み、且つ垢拔のした趣味人を以て自負する佛人が產出した、一の都風俗に外ならない。

さう云ふ性質の文藝サロンガ現れるためには、劍戟の響遠き太平の治世を必要とする。佛蘭西に於ても、數回に亘る宗教戰爭（Guerres de Religion）の終熄を搖籃時代となし、王朝の基礎確立からその爛熟時代を以て極盛期となす所以である。十三世から十六世に到るルイ王朝の四代の間は、實にサロンの黃金時代であつた。殊に吾人の興味を惹

くのは、種々なる意味に於て十八世紀である。十七世紀に於てもサロンは、文藝と深い交渉があり、文學史家の看過すべからざる重要な役目を演じてはゐるが、何れかと云へば、未猶、貴族社會を中心とせる社交場の感があつた。そして文人達も、同座はしても、多少階級的に蔑視せられ、河原者視される傾がないでもなかつた。その結果、實際的な文壇の動に對しては、比較的直接な關係に立てゐなかつたかのやうに見える。がしかし十八世紀に入ては種々の原因からしてサロンが平民的になり、前者が多く貴族を主とした集であつたに反し、後者は、才能さへあるなら、何等氏も素姓もなき文人藝術家でも、大にこれを歡迎し、一座の花形として尊敬するやうに變て來た。そして單に風流清閑を樂むと云ふ社交機關以上に出で、時によつては、文藝の大勢を支配左右する力を持つやうになつて來た。氣品風格の點に於て、大分その質が低下したことは免れないが、その代、實際文藝との融合が密になつた譯である。

サロンがかう云ふ傾向を取るやうになつた最大なる原因は、云ふまでもなく、主人役たる貴婦人連の力によるのである。

既に述べた通り、サロンを開いて客を迎へるのは、常に閨秀文士才媛の類であるが、何故さうであつたか、何故男は主人公になれなかつたかと云ふに、それは矢張、佛人の性質に基くものと思はれる。一般的に見て彼等は、粗野なもの野卑なもの荒削なものを嫌ひ、洗錬されたもの上品優美なものを好愛する。その結果、所謂佛蘭西趣味なるものは、生氣潑溂たる清新な味がないことにもなるが、一面、人巧を極めた輕妙派手な心持が窺はれる。彼等は質朴剛健な田舍者ではなく、華かな都の子である。大体に於てかう云ふ嗜好を持た人達として、殊にその方面の感受性が人一倍強く發達してゐる文人藝術家として、同じサロンを訪問するなら、色氣も艶氣もない男主人の家より、別嬪で氣の

利た才媛の方を悦ぶのは分り切た話であらう。その結果でもあらうが、有名なサロンと云へば、何時でも婦人が主人役を努めてゐる。否さう云ふより寧、サロンと云へば、皆女の主宰と決てゐるのである。

次に十八世紀と云ふ時代は、王朝政治の崩壞を前に控へた爛熟期にあたり、一般の空氣及趣味が大に艶麗且つ女性的であつた。そこで上流有閑の貴婦人達は、時代の嗜好を代表する女神として、常に持嘶さるゝことゝなつた。佛人の傳統的精神たる婦人敬愛（galanterie）の風は、少くとも表面上、この時代に於て絶頂に達した。テエヌの言葉によれば、社交場裡に於て貴婦人は、一度輕く頷いて會釋すれば、十遍挨拶したことになると云ふことである。周圍に控へた貴族達が、皆爭うて叮嚀な御辭儀を返すからである。[2] 唯一片の微笑を拜まんがため男達は、財布の底を叩いて豪奢な贈物をしたり供應をしたりして、毫も悔ゆる色がない。かう云ふ風にして彼女等は、期せずして時代の女王となつた。王座についた上流婦人達は、如何にも男の氣を惹くやうな、阿だつぽい派手な嬌姿を凝らし、粉飾化粧を事とし、ゴンクウルの所謂 Caillette 風が貴婦人の間で力を得ることゝなる。[3] もとから技巧的で濃艶であつた十八世紀の風俗は、彼女達の趣味に影響せられ又迎合して、更に益々その方向へ向ふことゝなるのである。

かくの如く勢力を得た婦人達が、それ〴〵サロンの牛耳を執てゐた以上、我々は、當時の文學一般がどのやうな影響を受けるか、想像に難くないのである。又事實上、十八世紀の貴婦人社會に於ける文藝熱藝術趣味は、隨分盛なものであつた。女の方は男に比し、元來、遙に纖細な情緒に生き、鋭敏な感受性を持てゐると云ふ事實は、當時に於て最明瞭に看取されるのである。未社會の一偶に多少殘存してゐる封建時代の遺風のため、貴族達は、何れかと云へば酒とか賭博とか狩獵とかの如き、比較的不風流殺伐な方面の娯樂に身を委ねる傾向があつたが、上流婦人達はこれに

反し、半ばその身嗜みから、半ば女性と云ふ本來の性質から、盛に讀書し、繪畫彫刻音樂の如き美術一般に親しむのを習慣としてゐた。社交禮式などに對して、非常に複雜且つ高尚な趣味を持てゐた彼女達として、さう云ふ精神的素養は、外部の裝飾が重要であつたに對し、大事な內面的化粧に外ならなかつたのである。それは皆、苟も上流淑女たるべき者の大事な資格であつたのである。そこで當時の婦人達は、詩文を讀むにも熱心であつたし、藝術を味ふにも眞劍であつたし、又思想を理解する上にも進步してゐた。そこで彼女達は、一般的に云て、男性とは比較にならん程の高い文化的敎養を積むことになつた。殊に文藝上の批評、判斷、鑑賞に於ては、猶一層この感が深かつた。

このことなくしても、既に社會の女王たりし彼女達は、實際文藝に於ても、更に一倍重要な役割を演ずることになる。文藝も藝術も、凡て婦人を中心として發達し、彼女達を目的として書かれ創られ、貴婦人達は終に有力なる保護者となつてしまふのである。この點に關しゴンクウルの云ふところを摘記して見る。

「十八世紀の婦人達は文藝のパトロンヌであつた。その關心の深さにより、その愛好心の强さにより、娛樂を求むる熱心さにより、彼女達は、文藝を自分のものとなし、女性のものとなし、終にこれを左右し支配するに到るのである。文藝のみならず、十八世紀に於て書かれたものは、皆凡て彼女達の膝元で執筆されしに非ざるやを疑はしむる位である……婦人達は文士連に取て、詩神（ミユウズ）であり先生であると同時に、又審査人であり最上の讀者であり且見物人であつたのである。哲學上の理論さへ、屢々女性の敎示から生れることが多いが、若、筆者にして流行と反響とを欲するなら、先づ第一に笑顏を見せてその甘心を買はなくてはならない。科學の諸問題さへフオントネル式に、盛に化粧を凝らして、彼女達の手遊となるやう注意する必要がある。モレレやガリアニの如き經

濟學者でさへ、大に屯智才氣を振廻してゐるが、皆婦人讀者の讃意を得んこの下心に外ならない。これを要するに、あらゆる作品の價値を決定し、著者の輕重を判定するのは、この全能なる女神連の權限であつて、如何なる思想も、如何なる知識も、又如何なる才氣も、彼女達に禮讃の辭を獻ずることなくして世に出ることは決してないのである。試に劇壇に於ける婦人の勢力を見よ。女の氣まぐれは、直ちに初演の運命を決する。作者の功名心の成否は、一にかゝつて彼女達の心にある。……將に失敗に終らんとする悲劇でも、一度貴婦人連の拍手を浴びれば、忽の中に甦り、又成功せる喜劇でも、一度彼女が欠伸をすれば、すぐ流行らなくなつてしまふ。舞臺に上すべき脚本を決定したり、文士の筐底から古原稿を引張出したり、改作加筆したりするのは、皆彼女達の力であつて、大臣王者こ雖、到底これには敵はない。……婦人連の後援なくしては、拍手喝采は勿論、上演すら困難である。それどころか、讀まれることさへ覺束ないであらう。これは偶々例を芝居に求めての話であるが、文學こ云ふ文學、作者こ云ふ作者、あらゆる冊子書籍の類凡て、彼女達に路を拓いて貰はなくては、決して世間に顏を出すことが出來なかつたのである。」云々。(4)

婦人の紹介によつて文士連も、始めて顏出が出來たこするなら、さしづめ彼女達は、丁度今日の新聞廣告のやうな役目を務めてゐた譯である。くだけて云へば、所謂月評子の仕事を引受けてゐたことになる。そこでかゝる趨勢に應じて、目先の利く文士達は、盛に婦人連の好意をうるに汲々たる結果、凡才にして高名を博する果報者が多い半面、阿諛追從に巧ならざるため、可惜才能を抱きながら、人知れず埋れる者も隨分多いこ云ふことになる。ルツソオが多くの貴婦人、殊にリユクサンブウル公夫人の特別なる保護を受け、ヴオルテエルがポンパドウル夫人やリシユリユウ

夫人に愛せられ、マリヴオがタンサン夫人に贔負せられたことなぞ、すべて周知の事實である。これに反して、彼等と比肩するに足るヂデロオが、今日に到るまで比較的閑却されてゐるのも、上流婦人との緣が薄かつたためとされる位である。(5)

かくの如き婦人の文壇的勢力は、終にアカデミイにまで及んだ。アカデミイは、云ふまでもなく、佛蘭西に於ける最高の文敎の府であり、その抱擁する四十人の會員は、皆當代一流の人物たるべき筈である。新會員は、缺員ある毎に、選擧により決定さるゝ規定であるに拘らず、十八世紀にあつては、常に貴婦人連の壓迫干涉を受け、會員は皆その云ふがまゝに動かなくてはならなかつた。ルウスタンは貴婦人若くはその主宰するサロンの後援で當選した連中の名を大分あげてゐる。(6) ランベエル夫人はモンテスキユウを推した。タンサン夫人はマリヴオを、デフアン夫人はダランベエルを推薦した。デオフラン夫人の如きは、一年の中に三人の文人をアカデミイへ入れ、その後間もなく、多くの反對を排して、幇間文士マルモンテルを會員たらしむるに成功した。ランベエル夫人は、アカデミイの半分を作りあげたと稱せられる。かくして殆すべての會員は、悉、直接間接にサロンの常連から選ばれることになり、アカデミイは結局、テエヌの所謂「國立大サロン」(Un grand salon officiel) と化してしまふのである。

右にあげた文士連は、皆それ〴〵十分の資格を備へてゐるからよいとしても、かう云ふ形勢の下に於ては、一冊の著書もなく、何の文才も持合せなくても、サロンで羽振がよいため、會員の椅子を贏ち得る者も隨分出て來る譯である。丁度學校の先生達が、上級學校へ入學し得た卒業生の多きを誇る如く、サロンの女主人公達も、それ〴〵盛に勢力爭を演じ、相競うて會員を送り込むことになる。ルウスタンは、無名の一文士に過ぎざる自分の情人を當選せしめ

た貴婦人の例さへあげてゐる。[7] 彼は猶これに就て面白い例をあげてゐる。丁度一七七一年に、巴里へ大象が一頭曳て來られた。何しろ當時として珍らしいことなので、毎日彌次馬連が押寄せて、廣場に見物人の黒山を築いた。ところが、何時誰が作たともなく、例の巴里子の屯智で、次のやうな流行唄が節面白く歌はれるやうになつた。

Cet éléphant, sorti d'Asie,
Vient-il amuser nos badauds?
Non; il vient avec ses rivaux
Concourir à l'Académie.

云ふまでもなく、近頃「有象無象」が無暗にアカデミイ入をするのを嘲弄する意である。

かく觀來れば、當時の文藝一般は女の天下であり、サロンは文人の登龍門であつた。婦人達が客間を開いて彼等を迎へたと云ふより、文士の方で何か御利益にありつかふと思うて、盛にお百度を踏んだと云ふ方が當てゐる位である。

しかし、サロン自身の性質は、文藝的社交機關としての域を出でない。主人の椅子に座てゐるのが貴婦人である以上、そこには自由奔放なる快談もなければ、口角泡を飛す激論も認められない。その上、何と云うても十八世紀は、廣い蒼空よりも浮彫を施した丸天井を好んだ。白日眩き大陽の光よりも仄暗き蠟燭の薄明りを慕うた。自由なる大氣よりも柔い室内の空氣を愛した。そして同時に、人巧の極致を極めた優艶な形式美と、手のこんだ調和を尊んだ時代である。何事にも上品風雅と云ふことを忘れない。ルッソオは、サン・ブルウの口を通じて、この脂粉薫香の氣漂ふ

サロンの雰圍氣を、次のやうに寫してゐる。

「談話の調子は流暢にして澱みがない。重苦しくもなければ輕薄にも流れず、高級なれども衒學に墮ちず、陽氣にして喧噪に到らず、慇懃叮嚀なれども氣障嫌味なく、粹好みなれども虚飾を排し、洒落を悦ぶがその意曖昧なるを避けると云ふ具合である。一座の人に洩なく物言ふ機會を與へんがため、話題は常に凡ゆる方面に亘るを普通とする。何か話を持出すにしても、さり氣なく口を開き、どんどん先へ進んで行く。徒に一問題に停滯し深く穿鑿することは、列座の客を倦ましむるが故である。そして自説を發表する際にも、明瞭正確にして高尚上品なる言葉を選び、口數少くして饒舌に陷らざるやう注意する。元來が談笑裡に自己を啓發することを目的としてゐる以上、頑强に自説を固守するとか、執拗に他説を攻擊する如きは、決してサロンの禮式に適はない。從て、話が彈んで、議論爭論に到らんとするやうな場合は、直ちに緘默するを常とする。」[8]云々

こゝにはサロンの文藝的方面よりも、寧ろその社交場としての性質を物語てゐる。がしかし、十八世紀は又一面禮儀作法の世の中であつて、かう云ふ場合、他人の感情を尊重すると云ふことは、一種の不文律であつた。そしてその拘束は中々力があつて、暗默の中に各人の頭を支配してゐるから、時には自分の贊成しないやうな意見が出ても、それが多數の考なら、遠慮して默てゐなくてはならない。そこで、皆互に他人の顏色を窺ひ、その意中を忖度し、進んで獨自の意見を吐くのを躊躇する傾がある。自分も他人と同樣に感じ且つ考へなくては、何か恥しいやうな心持を起させるのである。一七八一年、ネツケル夫人のサロンで「ボルとヴイルジニイ」が朗讀された時、誰もこの小説に感心しなかつたに拘らず、唯一人そこに居合せた若い婦人が、感動のあまり涙を流した。それを見つけた主人のネツ

ケルが、意氣惡さうな微笑を洩らしたので、その婦人は慌てゝ涙を拭き、素知らん顔をしてしまつたと云ふ話が傳てゐる位である。(9)

そこで中には、こんな不自由な束縛を逃れて、わざ〳〵女氣なしのサロンを開いた連中も二三あつた位である。百科全書一派の一人として知らるゝオルバックの木曜會 (les jeudis)、及、矢張仲間のエルヴエシウスの火曜會 (les mardis) の如きその好例である。しかしかう云ふ人達は、何れも革命前派とも云ふべき破壞的急進思想を抱いてゐた所謂 philosophe 連であつて、サロンの形式的社交を嫌たと云ふより、寧、人前では到底發表出來んやうな過激な問題を、自分達の間だけで秘密に又公然と、誰憚らず論じ合ひたかつたものと見るのが至當であらう。であるからサロンとは自らその性質を異にする。謂はゞ、思想傾向を同うする同人連の會合にすぎないのである。從て吾々の研究から除外しても差支ないと思はれる。

しかしながら、一口に十八世紀と云ても、革命の破裂まで八九十年もあるから、この永い間サロンが常に同樣の傾向をとり、同樣の內容を持ちつゞけてゐたとは無論云ひ難い。矢張時の流に應じて、次第にその姿を變へて來なくてはならない。その意味で大体次の三段階が認められる。

第一期は初期から中頃へかけた頃であつて、空氣が未だ大分貴族的である。會話の材料も、純文藝純藝術に限られ、主として才人粹人が歡迎された。謂はゞ貴族連の風流會のやうな觀がある。それが十八世紀の中頃になると、例の百科全書の時代で、科學的精神が勃興し、理智的に事物を觀察せんとする風が流行するに從ひ、サロンでも、文人藝術家と相列んで科學者哲學者が悅ばれることになる。これを第二期とするなら、その後の第三期は革命を控へた後半世

紀であつて、政治問題社會制度の如き話題が興味の中心を占める。この三つの區別は、同時に、ルイ十五世の外務大臣ベルニスが、その「追想錄」の中に述べてゐるところである。

「自分が社交界へ顔出した頃は、通人氣質が大に幅を利かせてゐて、何處のサロンへ行ても、一人は必ず自慢の立役者がゐた。宮廷に於ても巴里に於ても、小アカデミイとも稱すべき文藝倶樂部が流行し、文人は皆書齋を去て社交人となり、時を得顔に歩廻てゐたし、婦人は婦人で、皆才媛を以て自惚れて居た。本は夥しく出版され、その調子悉く浮薄輕佻であつた。がしかし世紀の中頃になると科學思想の方が勢力を占め、貴婦人とも云はれる人は大抵、昔の小姓擬ひに、學者を引連れてゐるやうになつた。ところが今日に到ては、政治社會の問題が上流社會の寵兒となり、各國の大使連がサロンの引張凧となつてゐる。」(10)

【註】

1、Somaize : Dictionnaire des Précieuses. Bibliothèque elzevirienne. 2 vols. の第二卷參照

2、Taine : Les origines de la France contemporaine. Tome I. P 220

3、Goncourt : La femme au XVIIIe siècle. Tome II. P. 131

4、同上 P. 125-126.

5、同上 P. 128

6、Roustan : Les philosophes et la société française au XVIIIe siècle. P. 204-205.

7、同上 P. 204.

8、Rousseau : La Nouvelle Héloïse. II. 14.

9、Julleville : Histoire de la Langne et de la Littérature française Tome VI. P. 422

10、Bernis: Mémoires. I. 96.

II

十八世紀のサロンの中、先づ歴史的に一番始に來るのは、メエヌ公夫人の、所謂 Cour de Sceaux である。夫人は、ルイ十四世と寵姫モンテスパン夫人の間に生れ、メエヌ公に嫁した王女であるが、十七世紀の末頃、王老ひ、華麗なヴエルサイユの宮廷生活も、その黄金時代を終らんとし、次第に陰鬱の影に閉されんとする勢となるや、退いて、ソオに大金を投じ立派な御殿を造營した。そして一七〇〇年頃からそのサロンを開いて、文人雅客を集め風流生活に凝ることとなつた。彼女の窃なる野心では、ヴエルサイユの榮華の後繼者たらんとするにあつた。從て、時代が十八世紀に入たとは云へ、猶その空氣が大に貴族的であつた。

サロンの常連は、貴族仲間の通人や上流婦人を始とし、フオントネル、ラ・モツト、ヴオルテエルの如き文人連であつた。この外主人たるメエヌ公に對し、學問上の相手役を務めるマルジウと云ふ男があつた。この男の文學的知識は、廣く古今に亘り、物理學でも天文學でも、何でも御座れ式に知てゐて、しかも物腰叮嚀な粹人と云ふ重寶な人間であつた。メエヌ公夫妻にとつては、一種の學問幇間のやうな者であつた。そこで、サロンの行事とか、その他の催事とかを決める場合には、何時でも彼が肝煎役で、謂はゞ三太夫兼常任幹事のやうな役を引受けてゐた。內部の空氣は文士よりも貴族中心で、一意風雅な生活を送るを目的とした。謂はゞ殿樣の雅宴遊樂式のものであつた。マルジウ

がこの一座を龍頭鷁首の遊山舟に譬へて、Galère du bel esprit と呼んだ通りである。從て普通のサロン同樣文藝美術も無論大に愛好せられはしたが、飽くまで貴旅的品格が保たれた。普通の社交の外、即興詩を作り、又芝居を演ずることが多かつたが、殊に知られてゐるのは、Grandes Nuits と稱する派手な催であつた。暗夜の庭園に澤山の松火を點じて、一種の野外劇を行ふのである。舞踏奏樂の交錯するバレエのやうなもので、招待された連中が、次は誰、次は誰と云ふ風に、交る〳〵新趣向を持て來るのである。この催は十六回まで續いたが、ルイ十四世の薨去と共に中止されたとある。

その黃金時代は一七一五年頃を以て終とする。この年ルイ十四世歿して五才の十五世位に即くや、メエヌ公夫妻は西班牙大使セラマアルと腹を合せて、西國王フィリップ五世を後見役に立てんと畫策し、事露見に及び、捕へられバスチィユに幽閉された。一年餘にして獄を出で、一七二〇年頃再サロンを開きはしたが、夫人も年老ひ、立役者マルジウも昔日の俤なく、その空氣何となく陰鬱であつた。唯ヴオルテエルとデロネエ孃のため、漸く一脈の生氣が認められる位に過ぎなかつた。前者は常連中の常連で、こゝで小說 Zadig を書き、衆客の前で朗讀したこともある。又後者は、北佛ルアンの僧院に成人した孤兒であるが、妙齡の頃、メーヌ公夫人の側女となつて以來次第にその才智を認められ、信用を受け、終にサロンの客に伍して接待役となつた。才媛美人で、多くの客は、婆さんの夫人よりも、若い彼女に接するを目的として集たと云はれる。

このサロンは、細々ながら一七五〇年頃まで續いたが、その性質上、文士倶樂部と云ふ程開放的でない。前王朝時代の純貴族主義と、十八世紀サロンの中間であつて、先づ過渡時代と云ふところである。

その次に來るのはランベエル侯夫人（一六四七――一七三三）のサロンである。メエヌ公夫人が上流貴族の清遊を目的としてゐたに反し、ランベエル夫人のサロンは、大に進歩し、文藝的空氣が大分濃厚になつて來る。一六八六年夫に死別した頃から客を迎へ、その死ぬまで凡四十年間、女主人として大勢の文人思想家を招待して親しく交り、賢婦人として又才媛として甚だ名聲が高かつた。彼女はサロンこそ開きはしたが、元來眞面目で、又風俗紊亂の當時としては珍しく貞淑な貴婦人であつたから、殘された子女の教育にも熱心であり、その文藝に對する態度も眞摯で、毫も浮薄な調子が認められない。そのサロンは、一七一〇年頃から極盛の時期に入たと云ふから、丁度メエヌ公夫人の沒落の一寸以前と云ふことになり、夫人は既に六十三才の婆さんであつた譯である。

彼女は一週二日、火曜と水曜に客を迎へた。前者は文人のため、後者は貴族連のためとある。火水何れも晩餐を供して後、一夕を歡談に過すのであつて、ソオの宮殿に於ける如き豪華な催物は決してない。それだけサロンが純文藝趣味に向て來たのである。火曜會の連中は、ラ・モット、フオントネル、モンテスキウ、マリヴオの如き一流文士と思想家であつた。無論一人で火水兩方に出る人も澤山あつて、この區別は、たゞ大体の上の話に過ぎない。その一般的空氣は、心から文藝を賞玩すると云ふ態度に溢れ、各人代る代る自作を發表朗讀して、一座の批評を乞ふ習慣があつた。この目的のため夫人自身「母親より子に與ふる書」（Avis d'une mère à son fils. Avis d'une mère à sa fille）の如き教育的文字から、「友情」（L'Amitié）「老年」（La Vieillesse）の如き隨筆文を草したと傳へられる。これ等は皆サロンの連中に勸められ公刊されたが、後夫人は、「女文士（プレシウズ）」と嗤るゝを恐れ、手の屆く限買戻したと云ふ話がある。かう云ふ點から見ても、ランベエル夫人は、溫良內氣な人であつたやうに思れる。從て後に述べる純十八世

紀式サロンの如く、男女淫亂に耽る風もなければ、附きものであつた博奕もこゝでは影を見せず、純粹眞面目の文藝社交場であつた。その文學的傾向から云ふなら、新派の總大將フオントネルやラ・モツトがゐる事實に徵しても分るやうに、夫人の趣味は、古典派に非ずして寧ろ新時代に傾いてゐた。彼女自身「ホメロスはつまらん」と云てゐる位で、例の「新舊兩派の論爭」(Querelle des anciens et des modernes) に於ても、心持の上で明瞭に前者を支持してゐた。

かく考へて來れば、ランベエル夫人のサロンは、メエヌ夫人のサロンに比して、大分時代的に進歩してゐることが認められるが、しかし何れも純文藝が中心であつて、哲學とか思想問題のやうな批評的精神は、未だ人の興味を惹くに到らない。文學史家が呼むで Bureau d'esprit と呼ぶ譯である。云ひかへれば既述第一期に屬すべき性質のサロンである。

タンサン夫人(一六八五——一七四九)のサロンも、大体に於て第一期の性質を持てゐるが、しかし彼女は、そのサロンよりも、波爛多きその生涯により吾々の興味を惹くのである。男から男へと移て止まぬその亂行振、王や宰相を巧に籠落して盛に陰謀を逞しくする才氣振を見ると、吾々は全くその凄腕に感心せざるを得ない。そのサロンの如きも從て、文人雅客を迎へて清遊を擅にすると云ふより、彼等を集めて女王然と威張りかへつてゐた俤がある。

Claudine Alexandrine de Tencin は一六八五年グルノオブルに生れた。兄二人姉二人を持た末娘である。その中一人の兄ピエル・ゲラン・ド・タンサンは、敎會に入り次第に出世して修道院長となり大司敎(アルシエヴエック)となり、終に大僧正(カルヂナル)まで成上たが、此奴が大變な代物で、宗敎界を墮落腐敗せしむる貴族僧侶の好典型に屬する。後妹のクロオヂンと腹を

合せて凡ゆる策動を敢てし、私腹を肥やし、自己の立身を圖るに汲々たる野心家であつた。さてクロオヂンは幼い頃から頭の冴えた御轉婆娘であつたと云ふことであつたが、父親は、厄介な末娘と云ふ譯で彼女を僧院へ送り、尼として一生を送らせようと企てた。家名を舉ぐるには何の關係もなき娘達、殊に繼承すべき財産を持たぬ末娘を尼僧とすることは、當時の貴族間では普通一般のことであつた。その上又多少不良の傾向を帶びてゐたり、或は又、親の手に終へぬ惡戯娘達は、屢々懲罰感化の意味を以て、嚴格なる宗教生活に從はしめたものである。クロオヂンの尼寺入りはどちらから觀ても、當時として止むを得ざる運命であつた。

がしかし彼女は神に仕へて規律正しき生活を送るためには、あまり活潑であり、派手好であり美人であり、從てあまり婆婆氣が多すぎた。そこでクロオヂンはあらん限りの力を出して父の計畫に反抗したが、終にその心を飜すことの不可能を悟り、結局泣寢入と云ふことになつた。泣寢入はしたがその代僧院の中に於いて、自由氣儘な生活を送り、自分と同樣な境遇に泣く仲間を糾合して盛に暴廻つた。ポル・ルブウの講演に曰、

「彼女は御轉婆娘達と一緒になつて、僧院の中で亂暴の限を盡した。應接室を化して町隨一のサロンとなし、禮拜堂に裝飾を施して舞臺と化し、神聖なる彌撒を音樂演奏會としてしまうた。(1)」

かくしてモンフルリイの僧院は、彼女のおかげで、グルノオブルの粹人通人共の集會場となり、クロオヂンは女王となつてその牛耳を取るに到た。彼女の心では、窃に追放を希望して、半分故意に演じた亂行であつたが、中々事が註文通に運ばんので、終に最後の手段に訴へて假病をつかつた。即人知れず多量の嘔吐劑を服用して、七轉八倒の苦を裝ひ、やうやく療養のためと云ふことで、一先づ暫時外へ出して貰ふことになつた。この狂言成功してともかく自

由の身となるや、クロオヂンにとつて好運なことには、丁度その時頑固な父親が世を去てしまうた。これ幸とばかり彼女は、都を指して馳せ上り、腹心の兄ピエルの許へ轉げ込んだのである。凄腕の社交婦人、サロンの女王としての彼女の生活の第一頁はこゝに始るのである。丁度一七一一年と云ふからクロオヂン二十六才の女盛りであつた。

その後の彼女の生活は、陰謀と淫亂の連續であつた。先づ最初に關係したのは、シュヴァリエ・デッウシュと云ふ軍人であつた。この男も策略家としては、中々退けを取らない豪の者であるが、やがて二人の間に私生兒として男の子が生れた。生れると直ぐタンサン夫人は教會の入口に捨てゝしまつた。この子がルッソオと云ふ硝子屋の女房に拾はれて、後成人して立派な哲學者になつたダランベエルと聞いては喫驚さゝれる。その後彼女は、益々得意の才氣を發揮して、巧に上流の權力者に取入り、攝政フイリップ・ドルレアンの寵を得たかと思ふと、今度は、好色陰險な宰相ヂュボアを丸めこみ、その間兄ピエルのために出世の路を拓いてやつたり、自分の利益權勢を擴張することに專心してゐた。彼女としてその中一番大きな仕事は、例のロオ一件である。うまくこのペテン兼詐欺師に取入て、巧みに懐を肥した腕前は、中々感歎に値する。ルブウ曰、

「何と云ふ豪い女だらう！　戀愛問題、金錢問題、その他凡ゆる復雜な身邊の諸問題を彼女は、一瞬の躊躇踆巡もなく、又毫も困惑自失することなく、さつさと平氣でやつて退けた。金相談を持ちかけられた場合、利益の見込なければ唯の一度も「諾」の答をしたことがない。有象無象の請願者から運動を依頼された時、儲さへあれば、唯の一度も「否」の返事をしたことがない。」

この頃彼女は十分金を握り、兄は大司教（アルシエヴエク）に任ぜられ得意の絶頂にあつたが、不圖した蹉跌のため下獄することと

なつた。澤山クロオヂンが關係した男の中、ラ・フレネエと云ふ銀行家があつた。彼女は例のロオ一件をラ・フレネエに紹介して、二人で大に甘い汁を吸てゐたが、その後彼が失敗して無一文となるや、賢明なるクロオヂンは、もう弊履の如く捨て、顧みなかつた。ラ・フレネエはその薄情を恨み、女に欺かれたとて訟訴を起したが、敗れて物にならず、進退窮して再彼女の袖に縋りついた。ところが又もや冷な門前拂を喰されたので、絶望の極終に自殺してしまふた。そしてその際、所謂彼女の詐僞行爲なるものを、虛實取まぜ大袈裟に誇張して公表した。そこで忽タンサン夫人は捕はれてバスチイユ入となつた。平生から色仕掛の權勢を利用して盛に奸計を逞しくしてゐた彼女に對する裁判官の反感鬱憤は、誂向の好機會に打突つた譯で、こゝぞとばかり彼等は、クロオヂンを苦しめた。ラ・フレネエの屍と對決して自白を强要したり、侮辱嘲弄を加へて淫婦と罵り、鼠の跳梁する牢獄の一偶に投込で大に虐待をしたと云ふ話である。

やうやく出獄したクロオヂンは年既に四十を越してゐた。もうそろ〳〵波爛萬丈の過去に見切をつける時が來たことを、彼女は十分自覺した。ところが丁度その頃を境目として、一流サロンの名を擅にしてゐたランベエル夫人は、次第に老境に向ひ、後間もなく他界することとなつた。そこでタンサン夫人はその後を承けて、貴族町として知らるゝサントノオレ街に客間を開き、文人詩人を迎へて晩年を送ることに決心したのである。であるから、サロンの人としての彼女の生活は、やうやく一七二六年頃から始るのである。

けれども根が男勝りの豪の者であるから、聞きはしたが、サロンの中でたゞ温しくしてゐるだけでは滿足出來ない。タンサン夫人のサロンは、毎夜ジエスイツト敎の大本營（カルナエ・ジエネラル）となつた旨ルブウは告げてゐる。さう云ふのは無論

串談で夜中密に、大僧正とか大司教とか云ふやうな御歴々が、人知れず忍込むのを待受けて、飽くまで禁斷の果實を貪ることを意味する。この秘密の媾曳があまり目立つので、彼女は、朝廷の嚴命により一時巴里市外に退去しなくてはならなかつた。がそれも暫のことで、歸て來ると性懲もなく同じことを繰返す。或は將軍リシュリウと結托して私利を計り、或は腹心の貴婦人を納れて王の寵姫となすなぞ、年老ゐて一時隱退の決意はしたものの、中々その本性は拔けなかつた。例のルブウは、此頃のタンサン夫人に就て曰、

「幾つと知れざる大小無數の戀愛事件に關係して、彼女は猶以て足れりとせず、常に動いて止まなかつた。時には金持、時には裁判官、時には又軍人と云ふやうに、東西奔走して息ふことなく、昨日甲を庇ふたかと思へば今日は乙を陷れ、その活動振は全く席の溫らざる程であつた。若し當時電話があつたら、必彼女は交換手を忙殺したであらう。輿に乘てルウヴルへ行き、劇場へ廻り、大臣を訪ね、朝の中に二十本も手紙を認め、使に行く下男の足を棒の如く疲勞せしめ、或男女を結ぶかと思へば、又或夫婦の仲を割き、任官の運動をしたり請願書を認めさせたり、その上、駄作にしても、こもかく小說まで書いてゐる。」

かう云ふ始末であるから、彼女のサロンは大分樣子が異てゐる。文藝を樂しむと云ふより、文壇やアカデミイに對して、實勢力を揮ふ參謀本部のやうな觀がある。その一聲は、よく詩歌脚本小說の流行を左右し、一顰一笑は直に作家の運命に影響する。そして同時に、文藝の大御所となりアカデミイに勝る權威となつてしまふ。從てゴンクウルの所謂文藝の女神としての女性は、タンサン夫人の中に、最その代表的な姿が發見される。であるから彼女も、モンテスキウ、ラ・モツト、プレヴオ、マリヴオ、ヂュクロ、マルモンテル、エルヴエシウス等の如く、自分のサロンに集る

文人達を、半分は親しみと戯れの心持を現すためではあらうが、「吾が獸」（Mes bêtes）と稱し、サロンを呼むで「動物園」（Ma Ménagerie）と號し、毫も尊敬を以て遇しない。尻尾を振り振り集る群犬の頭を撫でる女主人の心持と多く擇ぶところがなかつたであらう。毎年正月の元日には、年玉として、常連の文人達にヅボン用の天鵞絨を贈與する習慣であつたと云ふ位である。が、その代夏になつて彼女が避暑のため、郊外なるバッシイの別莊へ出かけて行く時は、文士一同で藁帽子を贈り、狂歌を添へたと云ふことである。　これ等の事實に徴するも、文士連を集めて女王の如く威張てゐた彼女の姿がよく窺はれる。がしかしそれと同時に、他のサロンで見られない陽氣無邪氣な風が支配してゐて、四角張た禮式窮屈な遠慮の如きは、その片影もなかつたやうである。

サロン内の行事は、他と太した相違がない。新作披露、朗讀、批評、文藝談、その他一般的に漫談與太話に花を咲かせる位なものである。たゞしかし、これも女主人の性格によることではあらうが、博奕よし自由戀愛よしで、内部の空氣は、必しも眞面目とは云へなかつた。この點ではランベール夫人のサロンに及びもつかない。けれどもこの不眞面さのため彼女のサロンは、佛蘭西人のみならず、外國の貴族や文人達にも面白がられた。殊に英吉利人の間に好評であつたと見え、ポリングブロク、チエスタアフィルドなどの名が、常客の中に傳へられてゐる。（未完）

【註】

(1) Les grands salons littéraires, Payot, Paris. P. 93.　この書はカルナヴアレ博物館の講演集であつて、タンサン夫人に關しては、七九――一〇六頁に亘り Paul Reboux なる人の短文が載てゐる。以下引用するルブウの言葉は、一々頁を明示しないが、すべてこゝから拔いたことを附言して置く。